

終末の刈り入れ

シリーズ～終末を生きる～

2018/8/19 ヨハネの黙示録 14章

前章(13章)のお話し

- サタンによる最後の戦い
 - 二匹の獣による支配
- 「海の中から上って来る獣」
 - サタンと同等で、迅速・強靱・獰猛な性質
 - 世界を支配する(個人?組織?)
 - 神を冒瀆し、聖なる者に打ち勝つ
- 「地中から上って来る獣」
 - 最初の獣の像を造らせ、拝ませ、拝まない者は皆殺しにする<命がけで信仰を選ぶ!>
 - 右手か額に刻印(666)し、刻印のない者は売買できないようにする<明確に体に刻まれる>

14章1～5節

また、わたしが見ていると、見よ、小羊がシオンの山に立っており、小羊と共に十四万四千人の者たちがいて、その額には小羊の名と、小羊の父の名とが記されていた。わたしは、大水のとどろくような音、また激しい雷のような音が天から響くのを聞いた。わたしが聞いたその音は、琴を弾く者たちが豎琴を弾いているようであった。彼らは、玉座の前、また四つの生き物と長老たちの前で、新しい歌のたくいをうたった。この歌は、地上から贖われた十四万四千人の者たちのほかは、覚えることができなかつた。

14章1～5節

彼らは、女に触れて身を汚したことのない者である。彼らは童貞だからである。この者たちは、小羊の行くところへは、どこへでも従って行く。この者たちは、神と小羊に献げられる初穂として、人々の中から贖われた者たちで、その口には偽りがなく、とがめられるところのない者たちである。

天国の民

- 小羊(キリスト)と共にいる民
 - 「十四万四千人」(7章にも登場する)
- キリストと父なる神に従った者たち(殉教者)
 - 「その額には小羊の名と、小羊の父の名とが記されていた」
- 玉座(神の御座)の前で賛美を歌う
 - 「激しい雷のような音」「琴のような音」
- 彼らは靈的に無垢であった
 - 「童貞」とは、主なる神以外の神々に仕えた経験がないことを意味している

14章6～13節

わたしはまた、別の天使が空高く飛ぶのを見た。この天使は、地上に住む人々、あらゆる国民、種族、言葉の違う民、民族に告げ知らせるために、永遠の福音を携えて来て、大声で言った。「神を畏れ、その栄光をたたえなさい。神の裁きの時が来たからである。天と地、海と水の源を創造した方を礼拝しなさい。」また、別の第二の天使が続いて来て、こう言った。「倒れた。大バビロンが倒れた。怒りを招くみだらな行いのぶどう酒を、諸国の民に飲ませたこの都が。」また、別の第三の天使も続いて来て、大声でこう言った。「だれでも、獣とその像を拝み、額や手にこの獣の刻印を受けると、

14章6～13節

その者自身も、神の怒りの杯に混ぜものなしに注がれた、神の怒りのぶどう酒を飲むことになり、また、聖なる天使たちと小羊の前で、火と硫黄で苦しめられることになる。その苦しみの煙は、世々限りなく立ち上り、獣とその像を拜む者たち、また、だれでも獣の名の刻印を受ける者は、昼も夜も安らぐことはない。」ここに、神の掟を守り、イエスに対する信仰を守り続ける聖なる者たちの忍耐が必要である。また、わたしは天からこう告げる声を聞いた。「書き記せ。『今から後、主に結ばれて死ぬ人は幸いである』と。」「霊」も言う。「然り。彼らは労苦を解かれて、安らぎを得る。その行いが報われるからである。」

獣を拜んだ者への裁き

- 地上の民への宣告

- 「神を畏れ、その栄光をたたえなさい。神の裁きの時が来たからである。天と地、海と水の源を創造した方を礼拝しなさい。」

- 「大バビロン」(獣)の終焉

- 終末の民を惑わした

- 刻印を受けた者の裁き

- 売り買いをするための刻印を受けた者
- 「神の怒りのぶどう酒を飲むことになり、また、聖なる天使たちと小羊の前で、火と硫黄で苦しめられることになる。」

聖なる者たちへの励まし

- 終末を生きるクリスチャンは激しい迫害に耐えなければならない
 - 「ここに、神の掟を守り、イエスに対する信仰を守り続ける聖なる者たちの忍耐が必要である。」
- 殉教する人は幸いである
 - 「書き記せ。『今から後、主に結ばれて死ぬ人は幸いである』と。」「霊」も言う。「然り。彼らは労苦を解かれて、安らぎを得る。その行いが報われるからである。」

14章14～20節

また、わたしが見ていると、見よ、白い雲が現れて、人の子のような方がその雲の上に座っており、頭には金の冠をかぶり、手には鋭い鎌を持っておられた。

すると、別の天使が神殿から出て来て、雲の上に座っておられる方に向かって大声で叫んだ。「鎌を入れて、刈り取ってください。刈り入れの時が来ました。地上の穀物は実っています。」そこで、雲の上に座っておられる方が、地に鎌を投げると、地上では刈り入れが行われた。

14章14～20節

また、別の天使が天にある神殿から出て来たが、この天使も手に鋭い鎌を持っていた。すると、祭壇のところから、火をつかさどる権威を持つ別の天使が出て来て、鋭い鎌を持つ天使に大声でこう言った。「その鋭い鎌を入れて、地上のぶどうの房を取り入れよ。ぶどうの実は既に熟している。」そこで、その天使は、地に鎌を投げ入れて地上のぶどうを取り入れ、これを神の怒りの大きな搾り桶に投げ入れた。搾り桶は、都の外で踏まれた。すると、血が搾り桶から流れ出て、馬のくつわに届くほどになり、千六百スタディオン(約320km)にわたって広がった。

終末の刈り入れ

- 鎌を持つ人の子のような方(キリスト)登場
 - 刈り入れ=審判
- 刈り入れの開始宣告
 - 「鎌を入れて、刈り取ってください。刈り入れの時間が来ました。地上の穀物は実っています。」
- 刈り入れの始まり
 - 「雲の上に座っておられる方が、地に鎌を投げると、地上では刈り入れが行われた。」
- 刈り入れられた実は「神の怒りの大きな搾り桶」に入れられ、「都の外で踏まれた」

終末の目的

- 最後の恵みの時(救いのチャンス)
- 災い(戦い・天変地異・災厄)による注意喚起
- 証人たちによる宣教(11章)
- サタン(二匹の獣)による支配。それによって明確になる信仰
- 命がけで信仰を選び、守る!
 - 信仰による死が幸いとなる
- 獣は滅ぼされ、サタンに従った人々は刈り取られる
 - 666の刻印が動かぬ証拠となる